

産品の開発から「小呂の島知恵」の売り込みへ

本誌編集部

- 団体名…小呂島しまづくり協議会（福岡県福岡市・小呂島）おろしま
- 事業名…小呂島の売り込みプランナー育成事業

島の活性化に取り組む 小呂島しまづくり協議会

一五〇万人を擁する福岡市にあって、現在の人口は二〇〇人弱。小呂島は、同市姪浜めはまから一時間ほどの距離に位置する。旋網まきあみや刺網漁などの漁業が基幹産業で、島に着くと漁港に並ぶ大量の網がまず目に留まる。

今回の事業主体である小呂島しまづくり協議会（以下、協議会）は、漁協の青壮年部や女性部をはじめ、自治会や消

防団などの代表者により、島の振興に向けた企画調整を目的として設立された組織である。振興方針として、①漁から広げるしまづくり、②特色を活かした交流のまちづくり、③健やか・安心のしまづくりが掲げられている。この三つの柱のうち、今回の助成事業の中心となるのが①である。

島の郷土料理を活かした特産品の開発

小呂島では平成二四年から本格的に

特産品開発に取り組んでいる。島には福岡市漁協小呂島支所（正組合員五六人）があるが、このうち特に三十歳代前半の若手三人によって構成される加工部が、水産物の六次産業化やブランド化を担っており、彼らが「①漁から広げるしまづくり」の鍵を握っていると言える。

これまでに「漁師のしまごはん」の名を冠した魚フレークを商品化した。これは天然のブリを切り身にしてタレに漬け込む島の郷土料理「こねくり」を参考開発された。ブリの焼きほぐしで、基本の「伝統の味」（しょうゆ味）に加え、「柚子胡椒味」「塩こうじ味」の三種類を取り揃えている。百貨店や物



小呂島漁港には大量の網が並ぶ。



特産品を製造する加工場。漁港そばの一面に設けられている。土足厳禁。

商品を通した島の認知の向上を

産展示会への出展などで販路拡大を図ってきた結果、福岡市の給食に採用されるなど徐々に成果が表れてきている。

商品の流通は増えてきたものの、消

費者に小呂島の場所や、島での暮らしを十分に伝えられていないことが課題となっていた。そこで協議会では、しまづくりを牽引する島内の人材を対象に、さまざまな角度から島を売り込む商品を開発するスキルを身につけるための人材育成事業に取り組んでいる。

具体的には島に必要なスキルをもつ方を講師として招き、勉強会などを実施している。これは特産品開発と並行して平成二四年度より行っており、同二八年度は、本財団の助成を活用し、計六回の勉強会を開催した。今回、小呂島の「海と向き合うさまざまな『知恵』」をモチーフとして、地域それ自体をブランド化する」という方向性が確立。「小呂の島知恵」と名づけ、今後取り組んでいく内容も合わせて確認された。

小呂の島知恵は、以下の三つの柱からなる。

①漁師の知恵…しまの地魚 初夏



漁協加工部の島田祐樹さん。第22回全国青年・女性漁業者交流大会でプレゼンし、見事に水産庁長官賞を受賞した。

のイサキ、冬のヤズ(ブリ)など島で獲れる旬の魚は、漁業が中心の小呂島を語る上では欠かすことができない。こうした島の地魚を島外へ発信していく。

②暮らしの知恵…しまごはん 住民の食べ物物の保存の知恵(技術)が用いられた商品(「こねくり」やサザエご飯、蒲鉾など)に、小呂の島知恵のロゴマークを作成し、それを貼り付けて流通させることで、島のPRにつなげる。

③海と生きる知恵…しま旅 豊かな自然と向き合って暮らしてきた島の生活や文化、自然環境に触れる体験は、島を売り込む上で重要な素材となるとの認識のもと、平成二九年度以降、エコツアーを促進するためガイド育成やツアープランの醸成、体験メニューの開発などに取り組んでいく。

継続的な取り組みが 水産庁長官賞に

意見交換のため小呂島を訪問した日(平成二九年三月一〇日)の直前、うれしい出来事があった。三月一、二日に東京で開催された第二回全国青年・女性漁業者交流大会において、「島の知恵でしまづくりー6次産業化への挑戦」と題した小呂島の実践発表が、地域活性化部門で水産庁長官賞を受賞したのだ。加



小呂中学校の卒業式には島中から人が集まり、春から始まる本土での生活を激励した。

工品やその開発過程を通じて、島の認知度を高めたことが評価され、実践の好例として注目を浴びた格好である。受賞を契機に、本財団の助成終了後

小島愛之助・離島人材育成基金助成事業運営委員 のコメント

■ヤズフレークに続く次なる一手を

意見交換会の前日まで長く欠航が続き、本当に島へ渡れるのか不安もありましたが、幸運に恵まれ、波が比較的穏やかな日に訪島することができました。

小呂島のヤズフレーク（漁師のしまごはん）は、これまで個人的に何度か使わせてもらったことがあります。ご飯にかけてもちろん美味しいのですが、ごま油やオリーブオイルを混ぜてスパゲティの具としても合うと思います。こうした食べ方を写真入りで紹介するなど、レシピと併せて売っていくという戦略もよいのではないのでしょうか。

今後、「小呂の島知恵」としてブランド化を図っていくようですが、次の商品開発にも取り掛かってほしい。海が荒れることもあり、生鮮食品で本土にかなうことは難しいと承知しています。ヤズフレークの次の一手を楽しみにしています。

意見交換会で皆さんからお話をうかがうと、漁業施設や設備の更新に活用できる国の制度を求められました。離島漁業再生支援交付金や離島活性化交付金は、島での活動を手助けする制度ですので、紹介させていただきました。

島人の人材育成を通じて島の活性化を

島での意見交換会の翌日（三月一日）は、奇しくも小中学校の卒業式だった。

も、活動の幅をさらに広げていくことに期待したい。

全児童・生徒あわせて一三人のこの島で、平成二八年度の卒業生は中学三年の北川さくらさんただ一人。教職員や保護者のみならず、多くの島の住民が式に出席し、門出を祝った。北川さんの卒業生答辞は、島や島の方々への感謝の言葉に溢れており、会場は涙で包

まれた。出席者の多くは、この学校で学び、一五の春に進学などで島を離れ、再び島に戻って地域づくりに励んでいる方々である。四月から福岡市内の高校に通っている彼女が、島を誇りに大きく成長し、しまづくりの新たな担い手として小呂島に帰ってくることを願っている。

（佐伯）

